

# ISAPH

アイサップ  
ニュースレター

第32号

# News Letter

2019年3月30日発行



写真: マラウイ エディンゲニの村で出会った子どもたち

ISAPHはラオスとマラウイの母親と  
子どもたちの保健の向上を支援しています

NPO International Support and Partnership for Health



# かめのりフォーラム2019・かめのり賞表彰式に参加して

ISAPH事務局 磯 東一郎

この度、公益財団法人かめのり財団より、ラオスでのこれまでの草の根活動の功績が認められ、「かめのり大賞草の根部門」をいただきました。公益財団法人かめのり財団は、日本とアジア・オセアニアの若い世代の交流を通じて、未来にわたって各国との友好関係と相互理解を促進するとともに、その懸け橋となるグローバル・リーダーの育成をはかる団体です。同財団では毎年、日本とアジア・オセアニアの若い世代を中心とした相互理解・相互交流の促進や人材育成に草の根で貢献し、今後の活動が期待される団体を顕彰しています。1月11日に東京のアルカディア市ヶ谷において、かめのりフォーラム2019と合わせて授賞式が行われ、ISAPHの理事で国際協力事業を牽引する聖マリア病院国際事業部の浦部大策医師と私が参加しました。

今回はISAPHのラオス中部のカムアン県における、農村部の母子の健康増進と生活向上のための仕組みづくりを目的とした、県保健局・郡保健局職員の人材育成並びに住民ボランティア育成のための草の根活動の功績が認められ、同賞の顕彰に至った次第です。

授賞式では、かめのり財団評議員・かめのり賞選考委員を務め、長年テレビ朝日のアナウンサーとしてご活躍された宮嶋泰子氏による各受賞団体の事業紹介が行われ、ISAPHはラオスの活動ビデオと写真集を用いてプロジェクト紹介を行い、ラオスの食文化に根差した栄養改善活動に高い関心が寄せられました。

かめのり財団は、日本とアジア・オセアニア地域の若い世代の人材育成の一環として、毎年日本の青少年の海外研修とアジア・オセアニア諸国からの日本留学を支援しています。今回のフォーラムでは、今年度か



ISAPHのプロジェクト紹介

めのり財団のプログラムに参加した中高生や大学生から体験発表がありました。言葉の壁、文化習慣の壁にひるむことなく、若さと情熱で未知の世界に飛び込み、現地の人たちとの心の通った交流を通じて得た貴重な体験を、未来に羽ばたく夢を描きながら熱く語っている姿がとても清々しく、印象的でした。更に、アジアからの大学院奨学生の話では平家物語を研究している中国人留学生の体験談がありましたが、そのレベルの高さと日本語の流暢さに驚嘆しました。グローバル社会の中で国境を越えた人的交流が当たり前になった今だからできる国際協力の形があると感じます。個々のアイデンティティを尊重しつつ、更にダイナミックな展開を模索したいと思います。

最後に、このような機会をくださった公益財団法人かめのり財団の関係者の皆様に心からお礼を申し上げます。



表彰式の様子



かめのり財団評議員の康本健守様（中央）と記念撮影



## 住民に保健サービスを届けるために

ISAPHマラウイ 池邊 佳織

ISAPHでは2017年より現地保健ワーカーの活動拠点（兼住居）の建設事業を行っています。2017年は2棟の建設を行い、2018年はテルモ生命科学芸術財団様から助成金を頂戴し、6棟の建設を支援しました。現在4棟が完成し、残り2棟も近々完成予定となっています。

保健ワーカーは病院が遠い住民に対し、住民の居住地域にて初期診断・治療・病院への紹介・衛生教育等の保健サービスを提供しています。例えば、保健ワーカーが地域に居住していれば、子どもが熱を出した場合でもすぐに近くに住む同ワーカーを訪ね、マラリアの検査を行い、その結果に応じて治療薬を投与することが可能です。しかし、活動拠点がその地域にないと、保健ワーカーは毎日5km～10kmの距離を通わないといけなくなり、不在の間、住民は保健サービスを受けることができません。

本事業ではまず、県保健局の公衆衛生部長が保健ワーカーを通し、活動拠点が必要な場所の情報を収集します。この事業に対する住民の期待はとて大きく、県保健局へは同建物建設の要望が多く寄せられ、建設途中の

リストは現在36棟あります。場所を選定する際は視察を行い、コミュニティがどれだけやる気を持って協働してもらえるかを調査します。現地住民のオーナーシップを高めるためにも、レンガを焼いて積み上げるなど、自分たちでできる範囲まで進めてもらい、屋根・床・壁といった建材の調達が難しい物を支援し、同建物を完成させています。

今回建設を行った地域の多くは電気・水道・通信・公共交通機関のインフラが整っていない場所です。山間地や国境近くであったり、雨季に河川の増水で車両による通行ができなくなったりするなど、保健サービスへのアクセスが極めて悪い地域もあります。車を所有している人はごく限られているため、住民は体調の悪い中、または体調の悪い子どもを連れて、何時間も歩いてようやく保健サービスを受けることができるのです。

完成式典では、村長をはじめとする多くの住民が出席し、踊りや歌・太鼓演奏などで私たちをもてなしてくださいました。子どもから大人まで、現地の方々の笑顔を見ながら、こういう地域にこそ、この事業が必要であると強く思いました。

最後に、本事業にご支援をいただきましたテルモ生命科学芸術財団様に心よりお礼を申し上げます。



チャマララ・ヘルスポスト完成式典



鍵の受け渡し



完成式典にて村長とご挨拶



## 多様な食材を確保するグループ菜園

ISAPHマラウイ 山本 作真

2018年5月より始まったJICA草の根技術協力プロジェクト「母と子の『最初の1000日』に配慮したコミュニティー栄養改善プロジェクト」では、子どもの発育状況の把握、手洗いなどの衛生指導、食材の栄養教育や調理実習などを通じてマラウイの母子の栄養改善を行います。それには多様な食べ物が不可欠ですが、調査によると農村では非常に限られた種類の食材しか手に入らず、食べられていないことが確認されました。

いろいろなもの、栄養のあるものを食べなさいと教えても、そもそも入手できない状況では、言われた側もどうすることもできません。日常手に入るのは主食のメイズ（トウモロコシ）と葉野菜、豆、それにトマト。これらはほとんどの世帯で自家栽培しているので、お金がなくても食べられます。少し大きな集落では小魚や玉子、さらに大きな街になると豚やヤギの肉、牛乳なども売られていますが、自給自足に近い農村の暮らしでは日常的に現金を使う習慣がないため、週に何度も買って食べられるものではありません。

そこで、地域にある母親たちのグループを活かして、2018年末からグループ菜園を立ち上げました。マラウイは年末から雨季に入り、ほぼ毎日、数時間程度の雨が降ります。まず、この雨季には大豆、落花生、それにビタミンAの含有量を強化したサツマイモの栽培を開始しました。豆類は、肉や玉子を食べる機会に乏しい農村では貴重なタンパク源となり、粉末にして離乳食の材料としても使われます。また、ビタミンAは小児の発育に欠かせない栄養素のひとつですが、カボチャやマンゴーの採れる時期を除いて農村ではほとんど摂ることができません。地域の病院は5歳未満の子どもにビタミンAのサプリメントを配布しているのが

現状です。

農村における栽培で鍵となるのは堆肥作りです。メイズの栽培には化学肥料の使用が普及していますが、現金で肥料を買う必要があります。しかし、農村では一般的に牛やヤギなどが飼育されているので、家畜糞の入手は容易です。また、ほぼ全ての家庭が薪で調理するので灰もあります。これらと、メイズを脱穀して出た殻や、刈り取った雑草とを混ぜて発酵させた有機肥料の作り方を指導しました。マラウイで畑を見ていると、大抵は肥料不足だと感じます。化学肥料を買わなくても効果の出る堆肥は非常に重要です。

現在、乾季に備えて肥料や土地の準備を始めており、数年前まで全く見られなかったニンニクや、大きな街以外では手に入らないニンジンなどの栽培を計画しています。収穫された作物は自家消費以外にも、売って他の食品を買う資金にしたり、調理実習での使用を計画しています。初めて見る様な食材はなかなか受け入れられないのですが、以前のプロジェクト地域では現地の食事に合うニンジン料理を紹介して好評を得ました。このグループ菜園を通じて食材の選択肢が増えれば、調理実習で様々な食べ方も紹介できます。新しい食材がスムーズに受け入れられるよう、栽培方法から食べ方までを啓発していきたいと考えています。



調理実習でのニンジンレシピの味見



グループ菜園での種まき指導の様子



有機肥料の作り方講習

## ラオスの栄養改善プロジェクトを訪問して

聖マリア病院 国際事業部 **足立 基**

2018年11月10日から12日間、ラオス中部のカムアン県サイブートン郡で味の素ファンデーションの助成を得て実施している栄養改善プロジェクトを訪問しました。本件は、マラウイと同じく子どもの栄養改善を目指し、昆虫食の普及も活動の一つとして目指しています。

ラオスは東南アジア唯一の内陸国で「アジア最後の秘境」と言われ、欧米諸国の観光客に人気ですが、元フランス統治であったため、タケクでもフランス語を良く耳にします。しかし、日本語はもとより英語もあまり通じません。母国語のラオ語を話せないと日常生活も厳しいです。今回、メコン川を挟んだタイのナコンパノムから陸路でラオスに入国しましたが、日本以上に景色も車の運転ものどかです。

年齢に比較し低身長の子どもの栄養障害が多いと報告されており、タケクで出会う大人のラオス人は概ね小柄です。しかし食べ物はマラウイに比較すると10倍くらい豊富な印象で、「こんなに食材があるのに、何故栄養障害になるのか」と素朴な疑問がわきます。その答えはプロジェクトサイトで村人の生活を垣間見たり、現地の医師や看護師さんの話から、徐々に分かってきました。プロジェクトサイトのサイブートン郡の田舎では、子どもが病気で命を落とすのは極身近なこと、生活の一部で忌避すべきものと思われていないこと、そして、子どもに対する関心、子育てに対する意識がとても低く、結果、自分の子どもが何を食べているか、両親が知らないこともあるということでした。人々の健康に対する基本的な認識がとても低いと感じました。

また、周辺列強諸国から圧迫されてきた歴史のためか、現状に妥協し、改善を積極的に望まない思考があ

ります。それに輪をかけて、経済的な貧困と母親が教育を受けていないことが状況を悪くしています。

ISAPHでは日本の地域保健活動と同様、村へアウトリーチによる保健サービスを3年間実施しました。成果として施設分娩率が21%から65%と飛躍的に向上した一方、低栄養に起因する低身長は34%から43%に逆に増加し、人々が子どもの栄養に気を配るようになるには至りませんでした。わたしたちの健康に対する価値観を押し付けるだけでは、ラオスの人々の行動変容にはつながらない、すなわち「おいしいものを食べたい」というインセンティブだけでは十分ではないと考え、人々が希求する物質的な豊かさを後押しすべく、世界的に注目されている昆虫食を利用するのが、今回のプロジェクトです。隣国タイではコオロギやアオムシを加工したお菓子がスーパーに並んでいたのでも、持ち帰り病院の一部の方にもご試食いただきました。見た目、虫の形のまま!? なので、外見的にNGという意見は家内を筆頭に多かったのですが、2歳の娘は喜んで、畳に落ちた足やアタマも拾って食べました。ラオスには固有の昆虫食文化があり、安定的な供給ができれば副収入および栄養源として期待されます。



ラオスの食事



サイブートン郡のヘルスセンター



村人への啓発活動



## ゾウムシ養殖パイロット農家の第一歩

NPO 法人食用昆虫科学研究会 理事長

佐伯 真二郎

2018年10月末、1年間にわたる村落栄養ボランティア (VNV : Village Nutrition Volunteer) 研修の1期生が卒業しました。生徒は村の女性で、栄養や衛生、子どもの健康に関する講義を受け、調理実習で料理の技術も磨いてきました。栄養の知識と技術を持った彼女らに、今度は「具体的に栄養を得る方法」を指導するため、ヤシオオオサゾウムシの養殖を提案し希望者を募りました。

この昆虫にした理由は、1kg育てるための初期費用が6ドル程度で、うちエサのランニングコストが2ドルと格安な点です。また、世話も簡単で週1回5本のバナナと水を追加するだけです。養殖の手順を効果的に伝えるため動画を作成し、上映しながら説明しました。やはり動画は伝わりやすく、早く理解してくれたようでした。

11月に5世帯でスタートしたパイロット農家は各世帯3つの養殖槽をセットし、12月には最初の収穫期を迎えました。うまくいかなくても200g以上、うまくいけば1,300gの丸々とした幼虫を収穫できました。開始当初はそれほどやる気を感じていない様子でしたが、実際に育てて食べてみると美味しく、子どもが食べたがることで、モチベーションが喚起される好循環が生まれたようです。

エサのレシピはキャッサバとココナッツの皮を中心に、少量の配合飼料、米ぬか、糖蜜を使います。タケクでの養殖拠点では、成虫を村に供給する体制を整え、エサのレシピを最適化する実験をしています。現金を必要とする配合飼料を減らすため、キャッサバの葉や

バナナの茎などへ代替して比較しています。今後キャッサバが自給できれば、コストゼロで養殖可能なエサへと改良し、より現金収入の少ない世帯にも導入できる予定です。

収穫後のゾウムシは、ひと晩バナナかサトウキビを食べさせてフン抜きすると風味豊かになります。炭火で焼き上げるとカリッ、ジュワッと香ばしい串焼きの出来上がり。パイロット農家からは、特にサトウキビの方は香ばしさが強く美味しいと言ってもらえました。次はキャッサバを育てる畑を確保し、村でのゾウムシの自給自足が目標です。キャッサバが自給できるようになれば、その葉を食べるエリサン(カイコ)の養殖や、エリサンのフンをタンパク源としてゾウムシのエサに再利用する複合農業といった派生も見えてきます。

今回のパイロット農家の成果について3分ほどの動画にまとめ、YouTubeのISAPHチャンネルで公開したところ、4週間で350回以上も再生されました。村で上映した際も好評で、私たちの活動が世界とつながっていることを実感してもらえたようでした。この動画はISAPHホームページ (<http://isaph.jp/>) でご紹介している、YouTubeのISAPHチャンネルからご覧いただけますので、ぜひチェックしてみてください。



パークーン村での最初の養殖指導の様子。パイロット農家3世帯に養殖の手順を説明する動画を作成し上映した



パークワイドン村のパイロット農家deenさんと新人ラオス人スタッフのコーンサワン君。deenさんは最も養殖が上手で1,300gも収穫できた。バナナを食べさせたものとサトウキビを食べさせたものを比較するため炭火で串焼きに



パークワイトン村のケオタさん。バナナの茎を使うことを提案するなど、養殖のアイデアが豊富。こちらは焼く前のもの

## ラオス 新スタッフの紹介

### コーンサワン・シッチボン

こんにちは！ 私の名前はコーンサワン・シッチボンといいます。ISAPHラオス事務所で働き始めてもう5カ月目になります。実のところ、私はこれまで保健医療にかかわる勉強も仕事もしたことがありません。しかし、この事務所では日本人も同僚のラオス人もみんな仲良く、経験の少ない私を温かく迎えてくれたので、とても前向きな気持ちで仕事に取り組むことができます。

私の国、ラオスは、周辺の国々に比べて様々な開発が遅れています。そして、国民の多くが（特に農村部における子どもや女性においては）何らかの健康にかかわる問題を抱えています。そのため、住民の健康や栄養状態を向上させることはラオスにおいては重要な課題であり、自国でできないことは他国からの支援に頼らざるを得ない状況です。

特に栄養については、現時点での問題だけでなく、子どもの学習能力や将来的な健康状態など、ラオスの将来にとって長期的に負の影響を与えるということを知りました。私は、子どもたちをはじめ、新しい世代はラオスを変えていくことができる「未来」そのものだと思っているので、栄養状態の改善は、今、最も力をいれて取り組むべき課題であることをISAPHにきて理解しました。現在は、主に昆虫養殖と家庭菜園普及の活動に従事していますが、ISAPHの活動を通じて、子どもたちがどのような場所で生まれても同じように健康を享受できることに繋がれば嬉しいです！



## ラオスってどんな国？

### ラオスの「食」

#### ISAPHラオス 木村 江里子

ニューヨークタイムズの「世界で行きたい国」第1位に選ばれ、最近外国人観光客が急増したラオスですが、大半の日本人にとってはまだまだ未知の国。今回はそんなラオスの「食」についてレポートしたいと思います。

まずは、ラオス人のソウルフードから。ラオス人が愛してやまないのが、「ケンノーマイ」といわれるタケノコスープ。唐辛子と香草、パデークと呼ばれる魚を発酵させた調味料だけのシンプルなレシピですが、少し濃い味付けで何ともカオニャオ（もち米）が進みます。ただ、私はウジの湧いた見た目も味も強烈なパデークを経験したため（ラオスでは珍しくないようです）、パデーク控えめのものが好みます。村では昆虫を「ケンノーマイ」に加えてバリエーションを楽しむらしいのですが、昆虫の中でもオオコオロギか、1～2晩置いて胃腸の中の糞を出したフンコロガシを入れると美味のようです！

次にラオス人が家族で囲むちょっと贅沢な料理「シ

ンダート」のご紹介。これは、焼肉とお鍋が一度に楽しめるラオス人お気に入りの料理で、日本でいうと「すき焼き」のようなイメージでしょうか。もともとベトナムから入ってきたようですが、それを知らずに食べているラオス人も多いとか。特製の鉄板の真ん中で豚・牛肉を焼き、そこから落ちた肉汁たっぷりのお鍋で野菜を食べます。ラオスの豚・牛は、飼育環境が良いせいかうまみと歯ごたえがあり、とても美味しいんです！ 写真では卵をそのまま割り入れていますが、通の食べ方は卵の先端に1cmほどの小さな穴をあけ、そこからお鍋のぐりに均等に卵を流し入れる方法。肉汁と野菜の出汁、卵がうまく調和して口の中に広がり、何とも美味！ ぜひラオスを訪ねて「ケンノーマイ」と「シンダート」、ご賞味ください。



肉汁たっぷりのシンダート

## 最近のできごと 2018年10月～2019年1月

- 10月～1月 【マラウイ】ヘルスポスト4箇所(セント・テレザ、チャマララ、ペンベ、ムウィタ)において、現地保健ワーカーのための活動拠点兼住居が完成、開所式を実施
- 10月5日～7日 【マラウイ】プロジェクト対象地域にて現地保健ワーカーならびに無作為抽出された住民を対象としたフォーカスグループディスカッションを実施
- 10月22日～28日 【マラウイ】プロジェクト対象地域を管轄する保健ワーカー、農業普及所所員、栄養担当教員を対象としたケアグループ運営・衛生トレーニングを実施
- 10月26日 【ラオス】AINプログラム:第1期 VNV (Village Nutrition Volunteer) 11名が修了
- 10月29日～1月4日 【マラウイ】長崎大学大学院熱帯医学・グローバルヘルス研究科の山田直之氏をインターンとして受け入れ
- 11月1日 【ラオス】MOU6カ月活動報告会を開催(2.5年次)
- 11月5日～11日 【マラウイ】プロジェクト対象地域プロモーター、世帯リーダーらを対象としたケアグループ運営・衛生トレーニングを実施
- 11月6日 【ラオス】VNV1期生によるゾウムシ養殖パイロット農家が開始
- 11月10日～21日 【ラオス】聖マリア病院国際事業部の足立基氏をラオスに派遣
- 11月18日 地球市民どんたく2018(福岡)に参加
- 11月26日～12月4日 【ラオス】AINプログラム:本邦研修を実施
- 12月3日 【ラオス】在ラオス日本大使館主催のイベントでISAPHの活動紹介を実施
- 12月19日 【ラオス】AINプログラム:第2期VNV育成研修がスタート
- 12月22日・26日 【ラオス】村のリボリングファンド支援:財務管理能力強化リフレッシュ研修を実施
- 1月4日 【ラオス】サイブートン郡保健局年次報告会にて、ISAPHの活動が表彰を受ける
- 1月11日 かめのりフォーラム2019・かめのり賞表彰式に参加
- 1月23日 【ラオス】村のリボリングファンド支援:年次会議を開催



入会と寄付の  
お願い

ISAPHの活動を発展させるために、一人でも多くのご入会、ご寄付をお待ちしております。

**法人会員** 年会費：30,000円

**一般会員** 年会費：3,000円

### 【振込先】

郵便振込 口座名 特定非営利活動法人ISAPH  
口座番号 00180-6-279925

入会ご希望の方、ご寄付をお願いできる方は、ISAPH事務局までご連絡いただければ幸いです。

### 特定非営利活動法人ISAPH

#### 【福岡事務所】

〒813-0034

福岡県福岡市東区多の津4-5-13 スギヤマビル4階

TEL.092-621-8611

#### 【東京事務所】

〒105-0004

東京都港区新橋3-5-2 新橋OWKビル3階

TEL.03-3593-0188 FAX.03-3593-0165

E-mail jimukyoku@isaph.jp

URL <http://isaph.jp/>

## ISAPHの役員名簿

役職	氏名	備考
理事長	小早川 隆敏	東京女子医科大学 名誉教授
理事	深見 保正	元福岡県企業管理者
理事	浦部 大策	聖マリア病院国際事業部 部長
理事	江藤 秀顕	神山復生病院 医師
理事	渡部 和男	龍谷大学法学部 客員教授
理事	杉下 智彦	東京女子医科大学国際環境・熱帯医学講座 教授
監事	竹之下 義弘	東京六本木法律特許事務所 弁護士

【ISAPH ニュースレター 第32号 編集スタッフ】

石原 潤子 / 磯 東一郎 / 乳井 昌史

社会医療法人  
雪の聖母会



# 聖マリア病院

理事長：井手 義雄 病院長：島 弘志

〒830-8543 福岡県久留米市津福本町422

TEL.0942-35-3322(代) FAX.0942-34-3115

URL <http://www.st-mary-med.or.jp>

- 厚生労働省臨床研修指定病院
- 厚生労働省歯科臨床研修施設
- 厚生労働省臨床修練病院
- 地域医療支援病院
- 福岡県救命救急センター
- 福岡県総合周産期母子医療センター
- 福岡県救急告示病院
- 福岡県地域災害拠点病院
- 福岡県エイズ治療拠点病院
- 福岡県肝疾患専門医療機関
- 福岡県災害派遣医療チーム指定医療機関
- 福岡県第二種感染症指定医療機関
- 地域がん診療連携拠点病院
- 福岡県小児救急医療電話相談施設
- 福岡県児童虐待防止拠点病院
- 久留米広域小児救急医療支援施設
- A Baby-Friendly-Hospital-Initiative (赤ちゃんにやさしい病院) WHO・ユニセフ指定
- 自動車事故対策機構NASVA療護施設
- ISO 9001 認証施設
- ISO 15189 認定施設
- 日本医療機能評価機構認定施設 (一般病院 Ver.6.0)
- 日韓医療技術協力指定病院
- 久留米市病(後)児保育施設

※本ニュースレターの発行は、社会医療法人雪の聖母会聖マリア病院にご協力をいただいています。